

幽玄

題字
高秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No.18
平成11年9月4日

第十五回横浜五流能楽大会を終えて

金春流・常務理事 土屋 政雄

平成十一年六月五日(土)横浜能楽堂本舞台に於て、五流能楽大会が九時半より開演された。今回の大会が丁度十五回を数えて益々隆昌しつつあることは、ご同慶の至りである。当日は快晴に恵まれ、掃部山公園の木々も緑濃く絶好の能楽日和であった。

今回は素謡や仕舞をはじめ独鼓を含めて合計四十七番の熱演であった。また当日の出演者は延べ二百七十七名で、男性が六割であった。客席側は正確に掴んだわけではないが、常時百二十名位の方が熱心に観客として在席していた様に思う。演目では独鼓があつて興味をもっていたが、音曲があつて趣きがあつて良かったと思う。今後このような大会では一調とか独鼓とかの調子の演目があることが望ましい。

今日は当流が先輩方のご指導を受けて大会を初めて運営した。当初は戸惑いがあつて順調には

行かなかったが、次第に軌道に乗り、関係者の方々の協力を得て、ともかく無事終了して「ホッ」としたのが実感であった。この経験を生かして今後はより良い大会をと考えている。開演中は夢中であつたが、終つて見ると問題点を含めて気のついた点があつた。特に番組表の時刻表示で、一時間単位の進行予定時刻と終了予定時刻が実際とは差異があつた点である。その中で特に終了時刻が大幅に遅れて観客の方を始めとして、多くの方々にご迷惑をお掛けしてしまい申し訳なく思っています。今後は時刻通りに終了する様に十分検討して行きたい。

この運営を行なつて強く感じた事は、運営マニュアルがあれば良かったと思つたことである。私なりの素案を作成して見たので検討下されば幸いである。問題点を含めてこのマニュアルに一括されていると考えている。

太鼓の面白さ

〃体験の内より〃
髷流家老・監事 井實 昭子
連盟理事

囃子の太鼓の大ノリとは、大らかなノリのことです。大ノリの謡に乗って一クサリ十六を刻み打つリズムカルの面白さ。笛に乘せて序の舞をはなやかに、美しい旋律で明るく打つ太鼓は楽しい。「狸々」の涉り拍子平ノリを太鼓で打つ面白さは、楽しげに朗らかに、大きくゆったりとした舞を盛り上げていく楽しさであります。

喜多流舞囃子、「高砂」を打ちました時は、観世流の私には不安でした。特に、拍子不合の所、非常に難しく感じた神舞、でもうまく打つことができたのは、最高の喜びでした。「融」酌の舞、「三輪」喜多流舞囃子、それぞれの舞の位を太鼓で表現出来たらと意気に燃えて私なりに打ちました。流れるキザミ、止まるコイ合、お謡を助け、より効果的に打っていくのは、太鼓の責任であり義務であると思います。静かなものでは、求塚や砦の梓の出などは、静かな中に強さがあり、打てば打つほど静かに聞こえる。その難しさを打てたらうれしい。



それは私の理想です。私の稽古場のお一人は、ご自分の体験を基に次のような感想文を書いて下さいました。

『太鼓と私』

ご縁があつて太鼓を教えて頂く事となりました。人生も夕暮を迎えている私にとって、大業に挑むなんて、と

大変な戸惑いを感じたものです。おそるおそる撥を両手に打ち始めました。何と嬉しいことに初心者でも音が出るではありません。音が出るものはないと、遠い存在の楽器たちでしたから。これはとても有難く楽しい初体験でした。その上拍子も大中小と付撥の高低によっておのずからリズムに変化を生じて、音痴の私にもり易い拍子と感じ、初めて打つて太鼓の虜になってしまいました。太鼓の音の中に浸る丈で心の弾みを覚えるのです。まして自らが打ったという感覚は正に感動でした。人間の感情の原点にしがれる様なものが走り、素朴で清々しい思いで撥を置きました。

日頃私どもを取り巻く環境は、様々なストレスがかかる生活です。これらの解消の為に川のせせらぎ、鳥の鳴き声等の効果音を聴かせ、又、香りの中に浸るアロマテラピー等と療法が進むこの頃です。私にとっての太鼓はストレス解消の最高のものとなっております。長い歴史に培われた古典芸能にと、お叱りを受けると存じますが、この若々しく晴れ晴れとした気分を生む太鼓の醍醐味を、多くの方々に体験して頂きたくて拙い筆をとりました。この様な太鼓にめぐり会えた幸福を感謝し少しずつ学んでいく程に、奥の深い楽なことですから、私の生涯ではとても身につくとは思われません。しかし高い目標こそ確かな生き甲斐です。余生の私の日々誠に充実した太鼓とのつき合いに感謝の日々です。

横浜能楽堂をさらに活かそう

会長 新堀 豊彦

今、横浜能楽堂は全国で一歩うけている公立能楽堂といつてさしつかえないと思います。

東京に近いとはいえ、質の高い企画で、次々と評価を得ていることは御存知の通りです。

山崎館長をはじめ、館のスタッフの方々のえい智と努力が花開いてこの好評を博しているものと思います。各種公演はもとより、展示廊の利用や幾つかの奨励育成事業の成功。例えば「こども狂言ワークショップ」や「初めての謡教室」などの

「初めて……」シリーズ。又、連続講座もひとひねりした「作家・歌人が語る能の主人公」(五回)や「能の周辺」(七回)や、いまや名物化しつつある「みんなで謡う高砂」(五回)などの多彩なプログラムが、いきいきと展開されているのは素晴らしい実績であるといえるでしょう。能楽堂の利用率は平成十年度

の利用率となっており、研修室の方は、四部屋を通じて一八%ぐらいの平均で、一寸さみしい気がいたします。

同う所によると、「初めての……教室」講座は、謡、仕舞、小鼓とも定員をはるかにオーバーし、希望者の要求に応えられない状況であるとか。大変勿体ない話であります。現在、私たち謡曲、仕舞の愛好者にとって、大きな課題と思われているのは、素人の稽古人口の伸び悩み、特に若い初心者入門があまり見られないことではないかと思えます。

それが能楽堂の「初めての……教室」には多くの初心者が集まるといいます。この熱心な初心者の方々に失望感を与えないように出来ないものかと思ひます。

能にひかれ、能を見に來られる愛好者の方々に、能をより一層深く味わい、知るために、謡曲・仕舞・鼓などの稽古をおすすしめし、研修室の存在をより効果的なものとし、我々も何らかの形でお手伝いが出来れば最高ではないかと考えます。

横浜能楽堂のすばらしい機能が、十分にこれに添えてくれると信じます。

「交流のつどい」の御案内

第三回「五流交流のつどい」

は、平成十二年二月十二日(土)横浜能楽堂本舞台で開催される予定になっております。この催しは、謡曲を始められて比較的月日の浅い方に、本格的な能舞台で謡う機会を設け、日頃の研鑽の成果を披露する事で謡曲の楽しさ、面白さを味わって頂くためのものであります。本舞台に出演することは、企画や、費用の面で難しい点もありますが、能楽連盟では皆さんが気楽に、格安な費用で舞台上がって頂ける様、この事業を行っております。

どうぞ皆様の身近な流友や、指導をうけておられる先生に御相談されて、多数の御参加、ご来会を心待ちしております。尚、社中を御指導の先生には、お弟子の方々をぜひ御出演させて頂けます様、何分のお取り計らいをお願い致します。(申込みは各流派の役員まで)

常務理事 宝生流

秋山 尚 (第三回担当)

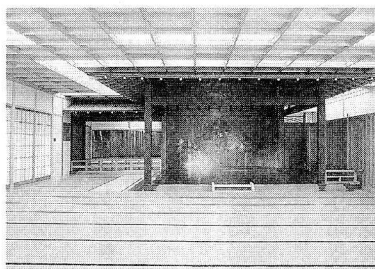


久良岐能舞台から

久良岐能舞台館長 山口 達夫

「第四十七回横浜能」の開催おめでとうございます。第一回「横浜能」が、昭和二十八年に開催されて以来、平成十一年の今日に至るまで、一回の休みもなく連綿と開催されてきましたのは、横浜能楽連盟の皆様のご努力と熱意の賜と、深く敬意を表します。

また横浜能楽連盟は、昨年創立五十周年を迎えられました。五十年の長きに亘り、能楽愛好家としての活動を通じて、横浜における能楽の普及振興に果たしてきた役割は、大変大きなものがあります。久良岐能舞台でも「謡曲と仕舞教室」や「能楽普及講座」などを通じて、横浜における能楽振興の一端(ほんのわずかですが)に関わっておりますが、皆様の活動に対して深く感謝しているところです。



久良岐能舞台は、現在磯子区の久良岐公園に隣接して約八千坪の敷地に建てられ、能楽をはじめ日本舞踊・民謡・茶道・吟詠など、日本の伝統芸能を支える各種団体の文化活動の「練習の場」や「発表の場」として使われていますが、大正六年、能楽会専務理事だった池内信嘉さんが囃子方の養成のため、帝國ホテル裏の能楽会事務所に建てたのが始まりです。

昭和六年に東京音楽学校(現在の東京芸大)邦楽科に寄贈され、昭和三十九年に同大学に能舞台が作られたのを機に解体されたものを、宮腰賢治さんが譲り受け、昭和四十年にここに移し、昭和五十九年に横浜市に寄贈したものです。

鏡板の老松と脇鏡板の竹は、日本画の大家・平福百穂氏の全盛期の作品です。

久良岐能舞台では、五流それぞれの「謡曲と仕舞教室」を行っています。五流そろった教室というのは珍しいのではないかと思います。平成十一年度は、一三八人の生徒さん方でスタートしています。教室は二年で卒業となっていますが、今年の生

徒さんの内、七九人が新規に謡曲や仕舞を始める人たちです。

また、「能楽普及講座」などの講座を年三回開催するとともに、「能装束公開展示」や「能の一日体験」などの事業を実施し、少しずつでも能楽に触れる人たちを増やして行きたいと思っています。

横浜能楽堂は全市的施設として、久良岐能舞台は地域に密着した施設として、それぞれ特色を生かしながら連携し、横浜能楽連盟の皆様のご協力もいただきながら、横浜の能楽の普及振興を図りたいと考えています。

もうすぐ二十一世紀を迎えますが、新しい世紀に向けて横浜能楽連盟の皆様が更なる発展をされることをお祈りするとともに、今後とも久良岐能舞台の事業にご指導・ご協力をお願いいたします。

子供の頃の染井能楽堂

常務理事 渡井 蘭子
宝生流

中央線沿線住居の吾家は、どこに行くにもまずは新宿へ。山手線に乗り換え七駅程の駒込で降りる。ホーム一杯片側が土手で、つつじ（さつき？）の花どきは今も目に残る美しさ。

駅を出て左下に線路を見ながら小路を行く。橋のところでT

字路になり、右折してちょっと行った左側が松平伯の染井能楽堂。私共は染井能舞台とは呼ばなかった。うろ覚えだが駅から近い。観音開きの古びた大門を入ると直ぐ左手に手漕ぎの井戸がある。正面の式台のある立派な玄関までちょっと広い敷地。

大きい会の際は半天を着た下足番が付く。玄関を上り左手がやや薄暗い舞台で、中廊下から前の正面と脇正は桝席で、薄い小座布団が敷き詰めてあった。正面中廊下の後ろは一段上って畳敷きで、素人会はまずこの辺から一杯になる。

脇正の後ろにカウンター風のお茶番があり、欲しい茶碗の数を言うと、お茶を入れてある土瓶になみなみとお湯を入れてくれて、丸小盆に載せて席に戻り、お茶を飲みながら拝見していたようだ。

このお茶番のおてるさんが可愛がってくれて、ラジオを聞いていらっしやいと内側に入れてくれて、昔の電話交換手が付けていたようなイヤホン？を両耳に付けてくれた。私と姉は門のそばの井戸までお茶用の水汲み専用のバケツで、子供には重く大変だったが、何度も運び大きな水瓶に溜めてあげた。お礼心だったか、おてるさんが辛そうだったからか。このおてるさん

のもう一つの大事な舞台磨きで、会の前日、白木綿の大袋に絞った卯の花を入れて、これで丹念に磨く。時には滑り過ぎて、荒い曲を舞って恐い思いをした事もあった。

戦前からウチの大会のホームグラウンドだったこの舞台も、戦争開戦になると離子入りは遠慮となり、素謡、仕舞で、それも遂に途絶えて終戦となった。

染井能楽堂が焼け残ったことは、同好者の大きな喜びで、能楽復興の機運は早く、プロ、アマ共各流で一時期賑やかに使われたが、各流本舞台が立派に再建されると共に染井はさびれ、ウチのような会でも春秋の大会を宝生能楽堂で開催するようになり、私も嫁いで神奈川県となり、解体前後の経緯も知らぬまま染井の跡地を見に行く折もなかった。私に白紙から斯道を今に染めて下さった各師匠も皆逝かれ、二世、三世の時代の今、私の周りも皆逝ったのに、尚神奈川に留って来た自分も不思議なら、子供の頃から足跡一杯の染井の舞台が、思いも掛けず当時の材で復元され、横浜能楽堂となった事。そこにこの齢で、またこの舞台を踏める自分がいることに深い縁を感じ、感謝し、一番知らせたい人達がいない事を残念に思います。

能に寄せる思い

梅若会 鵜池 昭吾

梅若会、小山文彦師の緑水会よりのご縁で、横浜梅若連合会にお世話になっております。

横浜能楽連盟にご関係の皆様が、能の普及に不断の情熱を注いでおられるご様子を拝見し、感銘を受けている次第です。

常に感じる事ですが、伝統芸能の発展と継承は専門の方々の努力と更なる創意工夫は当然ながら、大衆の幅広い興味や理解を啓蒙してご支援を願ひ、共感していただくことが大切であると思うのです。その意味でも「幽玄」に求められている意義は大きなものがあると存じますし、若者については、迎合ではない一般に受け入れられる多様な芸を磨き合う事も求められているのではないのでしょうか。それは今春上演された梅若六郎氏の「空海」は強く印象に残りましたが、初めて観能をされた方と能の幽玄を共有できた喜びを実感できたことでも明らかです。

我々日本人固有の美意識と現在の感性で「謡」を生活の身近に感じて古典を再発見していただけなら、この混沌とした世相に潤いをもたらしてはくれないでしょうか。

でしょうか。

戦後も五十年を過ぎ、平和ボケや過剰な権利意識の横行に危機を覚える社会問題が相次ぎ起きています。とりわけバブル崩壊後に露呈する各方面でのスキャンダルには社会秩序の喪失を嘆かずにはいられません。

又、環境破壊から常識破壊まで枚挙にいとまなく、極めて常識的なことが非常識となるのか判りにくい昨今、所詮は色即是空、空即是色と一人悟ったふりをするのか、あるいは能楽の一端に触れて、気力、体力共に充実の毎日を享受しているものとして自己満足しながら、右へ左へと間違ひだらけの私の人生も古稀を迎えて、これも節目かと佳境一恍惚となって終焉を迎える準備をするのか、人それぞれ生い立ち、経験、環境等に汚染された部分の濃度によって生き甲斐も異なっているのではないでしょうか。

これから能楽に親しみ、歴史を振り返り、残りの人生を人と共に喜び、人と共に悲しむことができる分別は呆けないよう自戒に努めるつもりです。

「幽玄」が一人でも多くの方に愛読をされて、益々その意義が高まることを痛感せずにはいられません。

面の事など

面打 岩崎 久人

「オマーク」、右受け、直し、橋懸りを運び、二松に止り、正へ向き「出入りの、月を見れば明け暮れの……、石の鳥居、ここなれや、立ち寄りて参いらん、いざ立ち寄りて参いらん」十分程の長い謡でようやく舞台に入る。能「弱法師」一昨年、目黒の舞台で二度目の能を経験した時の事である。稽古中、弱法師の面を打ち、その面で舞うつもりであったが、だんだんと稽古が進むにつれ、面の位が気に掛かりだし、もう一面打ち直した。最初に打った面は悲しさや憂いを出した面であったが、二度目に打った面は表情も強く悟りを開いた人間に近い表情にした。この二度目に打った面を使用したのだが、結果は成功したと思っている。シテ、俊徳丸の父親・通俊という人物は、私は嫌いな人である。他人の謔言を信じて追い出してしまうが、今は後悔して天王寺で七日の施行をする。この施行を受けた俊徳丸が天王寺に来るのが、父通俊は乞食となった我が子俊徳丸に気が付くのである。昼間は人目も多いので知らんふりをする。夜になり自分が親である事を知らせるが、俊徳丸は我が

親ながら悲しく恥かしくその場を逃げ出してしまふ。通俊は追いかけて手を取り夜も明けぬうちに高安の里へ連れて帰るのだが、その後の俊徳丸が幸せになつたとは思えない。私ならそんな親の所にいるより自由な乞食でいた方が幸せではなかつたろうか？

そんな思いもあり二作目の弱法師の面で舞ったのである。



弱法師の面も様々な表情の面が多く、本当の乞食の表情をした下品な面もある。一面物と言われる面、「景清」、「狸々」、「俊寛」、「山姥」などの面があるが、これは作者・演者ともに解釈の違いで出来た面であろうと思われる。面打としてもやりがいのある仕事と思っている。

『巴』と『七騎落』の謡跡

信濃に帰って義仲の菩提を弔っていた巴は、処刑のため鎌倉

に召出されたが和田義盛の願により助命され、義盛と結婚し朝比奈峠を一夜にして築いたという朝比奈三郎義秀を生む。巴五十六才の時和田一族は北条氏に滅ぼされ、再び孤独となった巴は越後の国に住んで九十才まで長らえたという。

この巴御前の墓は横須賀市岩戸一丁目山崎氏宅裏山にある。『七騎落』のワキ和田義盛は頼朝に重く用いられていたが頼朝の歿後北条義時と戦って敗れ自刃した。和田館址は三浦市初声和田（京急三崎口）にあり館址傍の義盛井は旱天にも清冽な水が絶えないと碑が建っている。和田館址から和田海岸へ出る松林の中に立派な城址の碑がある。しかし実際の城址はこの地ではなく他所らしいがまだ確認していない。（この紹介記事は繪書店発行 謡跡めぐり2（鎌倉編）青木実著より抜粋。）（幽玄編集部）

能楽堂だより

十月・十一月の公演

横浜能楽堂では、以下のとおりの公演を開催します。

「第十二回定期公演」十月三十日（土）午後二時。能「江口」（宝生流）今井泰男、狂言「磁

石」（和泉流）野村又三郎。九月十八日（土）チケット発売。「第十九回普及公演」十一月二十八日（日）午後二時。能「経誠」（観世流）梅若晋矢、狂言「墨塗」（大蔵流）山本則俊。十月十七日（土）チケット発売。いづれも正面三千五百円、脇正面三千元、中正面・二階二千五百円。発売日は窓口で午後二時、電話受付は午後二時三十分から。

講座「能楽史事件簿」

葛西聖司アナウンサーを探偵に見立て、トークショー形式で楽しく能楽の歴史を学ぶ講座です。

第一回「能に溺れる秀吉」九月十二日（日）午後二時。第二回「江戸はお稽古ブーム」十月三日（日）午後二時。第三回「能役者・写楽」十一月六日午後二時。第四回「元禄繚乱綱吉と能」十一月七日（日）午後二時。ほか第五回は十二月十二日（日）、第六回は平成十二年二月十三日（日）。受講料は各二千元、発売中。お問い合わせ・お申し込みは（二六三）三〇五五。

編集後記

▽今年の夏は猛暑、加えて豪雨禍と、これまでに経験したことのない厳しいものでした。多く

の皆さまには、この暑さ真盛りのなか謡に仕舞にと、集中稽古や自主発表会等ご精進されたことと思います。編集子も週末毎に大汗をかき、打ち上げに麦酒を痛飲…。

▽今号では「久良岐能舞台」について、山口館長に執筆いただきました。能楽堂と連携しあつて、能と謡曲の普及発展にご尽力いただいておりますことに感謝申し上げます。

盛夏の一刻、久し振りに久良岐を訪ねた。その日は夜来の雨もあがり、門から玄関までのアプローチは打水されたようにしっとりとし、大小の樹々や草花までもが水気をたっぷり含んで活き活きと濃い緑一色になっており、夏の閑かな佇まいの久良岐を堪能できた。

▽各流のご協力をいただき原稿は予定どおり集まりました。これからよりしく願ひいたします。（MS記）

横浜能楽連盟 連絡先

●文書郵送又はFAXの場合
〒233 0013 横浜港南区丸山台 丁目
二九一七 新堀方

FAX ○四五―八四四―二九〇三

●電話の場合

横浜能楽堂 遠藤れな

TEL ○四五―六三三―三〇五〇